vinetur

# シャンパーニュ出荷、輸出に支えられ10月までに2%増

10月の出荷量が3.4%減少した後も、海外市場がシャンパーニュ出荷全体の63%超を占めた

2026年11月14日（土）



シャンパーニュの出荷量は10月末までに2%増加した。フランス国内の販売が引き続き減少し、10月単月も落ち込んだ一方で、輸出市場が全体を支えた。

La Champagne de Sophie Claeysが伝えたComité Champagneの統計によると、1〜10月の出荷量は2億360万本で、2025年の同じ期間を上回った。増加の主因は海外市場だった。フランス向けは10カ月間で7,530万本と3.5%減少した一方、輸出は5.6%増の1億2,840万本となった。

つまり、年初から10カ月間のシャンパーニュ出荷量のうち、輸出が63%強を占めたことになる。この数字は、同地域が国際需要に大きく依存するようになったことを浮き彫りにしている。飲料業界

全体にとっても、この構成比は重要だ。調達、在庫、販売計画がフランス市場より海外需要に左右される度合いが高まる可能性があるうえ、回復の恩恵が生産者の間で一様に広がっていないためだ。

10月は後退した。月間の総出荷量は2025年10月比3.4%減の2,960万本だった。フランス向けの減少幅が最も大きく、出荷量は7.3%減の1,110万本。輸出も1%減の1,860万本となった。

10月の輸出の内訳を見ると、欧州連合（EU）向けは1.2%増の690万本だった一方、EU域外向けは2.2%減の1,170万本だった。暦の上でも、この低調な月は重要な時期に当たる。歴史的に、10月はシャンパーニュの年間出荷量の平均11.8%を占めており、年末の休暇シーズンを前にした重要な指標となる。

1～10月全体で見ると、国内需要と海外需要の明暗は鮮明だった。EU向けは6.7%増の3,900万本、EU域外向けは5.1%増の8,940万本となった。こうした伸びがフランス向けの減少を補った。

全体の増加の陰では、生産者のタイプによる大きな差も表れている。最も好調だったのはシャンパーニュ・メゾンで、10月までの出荷量は4.1%増の1億5,540万本だった。輸出は6.8%増えた一方、フランス向けは2.2%減少した。

栽培農家にとっては厳しい年となった。出荷量は4.4%減の3,210万本。フランス向けは7.7%減少したものの、輸出はなお6.2%増加した。協同組合も減少し、出荷量は3.3%減の1,620万本だった。メゾンや栽培農家とは異なり、協同組合は国内のフランス向けが2.8%増えた一方、輸出は8.7%減少し、海外でも後退した。

協同組合にとって10月は特に厳しく、月間出荷量は17.5%減少した。メゾン、栽培農家、協同組合の間に見られる明暗の差は、ワインやその他の飲料を扱う流通業者や買い手にとって重要になり得る。供給業者が販売に回せる在庫の量や価格設定、年末の割り当ての管理に影響する可能性があるためだ。

直近12カ月の出荷量はわずかな改善にとどまった。2025年11月から10月までのシャンパーニュ出荷量は2億7,020万本で、0.4%増だった。数年間にわたる出荷減少の後の小幅な増加だが、回復は依然として脆弱だ。同じ12カ月間で、フランス向けは4.1%減、輸出は3.8%増だった。

12カ月の統計でも、生産者間の同様の格差が示された。シャンパーニュ・メゾンは2.1%増加した一方、栽培農家は4.7%減、協同組合は2.1%減だった。11月と12月を残すなか、年末の推移が、シャンパーニュが成長軌道への回帰を確かなものにし、2025年の出荷量2億6,600万本を上回るかどうかを左右しそうだ。

英国に関する別の統計からは、シャンパーニュの主要輸出市場の一つが支えになっていることがうかがえる。Comité Champagneによると、1～9月の英国向け出荷量は5.8%増、金額は7.1%増だった。平均出荷価格は1.3%上昇した。

Champagne Agents’ Associationの会長、James Simpson氏はThe Drinks Businessに対し、出荷統計を消費者が実際に購入した本数と混同すべきではないと語った。英国のスーパーマーケットでの販売は比較的安定している。NIQのデータによると、小売販売は数量で1.7%増、金額で1.5%増の2億450万ポンドとなり、平均価格は27.93ポンドだった。

2025年に英国へ2,270万本が出荷されたことを踏まえ、Simpson氏は、現在の成長が続けば2026年には市場が再び2,400万本を超える可能性があると述べた。そうなれば、出荷量が2,550万本だった2023年の水準に近づく。